

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	王子明紀
2. 審査委員	主査：(兵庫教育大学 教授) 米田 豊 副主査：(岡山大学 教授) 桑原 敏典 委員：(鳴門教育大学 教授) 梅津 正美 委員：(上越教育大学 教授) 水落 芳明 委員：(兵庫教育大学 准教授) 福田 喜彦
3. 論文題目	意志決定の合理性を高める社会科授業構成論研究
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 王子明紀 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成31年2月16日(土) 11時00分～12時00分 場 所：兵庫教育大学ハーバーランドキャンパス 講義室3</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>序章 本研究の意義と方法 第1章 本研究における公民的資質の概念規定 第2章 公民的資質の育成をめざす社会科授業構成論の分析 第3章 意志(思)決定型学習における合理性に関する課題とその改善の方向性 第4章 社会科意志決定学習授業構成論-「基礎的意志決定学習」-の構築 第5章 比較吟味自己内討論法を用いた授業開発-「電源構成を考えよう」の場合 終章 本研究の成果と課題</p> <p>本研究は、従前までの意志決定学習のあり方を学習者の視点から批判的に分析し、思考過程の可視化に着目した新たな授業構成論である「基礎的意志決定学習」を構築し、実践をとおしてその有効性を明らかにしようとするものである。</p> <p>序章では、従前の授業者主体から学習者主体の社会科授業構成論への転換が必要であることを論じ、研究の射程を明確に示した。</p> <p>第1章では、社会科教育学の先行研究分析と学習指導要領の記述分析をもとに、本研究における公民的資質を定義した。公民的資質を「地域社会の一員として、国家の一員として、国際社会の一員として各社会で起こっていることを批判的に吟味して、民主的で平和な社会の形成に関わろうとする資質」と定義した。そして、公民的資質の育成の方法について社会認識形成をもとにした、個人による意志決定とした。さらに、個人による意志決定は論理的な思考過程をたどり、妥当性の高い根拠による合理性の高い意志決定をめざすことであると、本研究の射程を規定した。</p> <p>第2章では、①初期社会科を中心とする問題解決学習、②価値判断学習、意志(思)決定型学習、③社会参画学習を分析対象とし、その授業構成論と授業実践の分析をした。①が狭義の公民的資質の育成にとどまっていることと③の基礎に②の学習があることを明らかにし、価値判断学習、意志(思)決定型学習の優位性を明らかにした。</p>

第3章では、意志(思)決定型学習の成立要件を明らかにした。さらに、意志決定学習における子どもの思考の実態調査を行い、認知心理学の研究によって明らかになった確認バイアスの影響があることを明らかにした。そして、確認バイアスは子どもの意志決定学習においては、直感のバイアス(理由の後付けと不公平な比較)の影響として表出していることを明らかにした。以上の研究成果をもとに、従前の意志(思)決定型学習の授業構成論を分析し、直感のバイアスの影響を制御する意図がみられないことを明らかにした。

第4章では、第3章までに明らかになった意志(思)決定型学習の課題である直感のバイアスを制御する授業構成論として「基礎的意志決定学習」を構築、提案した。「基礎的意志決定学習」は思考過程の可視化によって、直感のバイアスの制御を図ろうとする新たな授業構成論であり、その学習過程は「インプットの可視化」と「アウトプットの可視化」からなる。「インプットの可視化」として、知識を構造化する過程を可視化しながら社会認識形成を図る「タグ」シート法を開発した。「アウトプットの可視化」については、二つの提案を行った。一つ目は、様々な選択肢を比較、吟味するための判断規準となる分析視点の獲得を中学校3年間の社会科学習で行う地誌学習のあり方を提案したことである。二つ目は、複数の選択肢を比較、吟味して意志決定したり、根拠を形成したりするための方法である比較吟味自己内討論法を開発したことである。比較吟味自己内討論法は、その思考過程を可視化することにより直感のバイアスを制御する方法である。

第5章では、特に比較吟味自己内討論法の有効性を検証するために、中学校社会科の実践「電源構成を考えよう」を開発し、実践をとおしてその有効性を検証した。子どものワークシート分析の結果、すべての子どもが理由の後付けと不公平な比較の課題を克服していることが明らかになった。さらに、自己内討論段階での授業者の効果的な介入を行う改善プランを索敵し、その有効性を検証した。その結果、さらにB評価以上の子どもが増え、改善プランの有効性を明らかにした。

終章では、本研究の目的である子ども主体の意志決定学習の授業構成論である「基礎的意志決定学習」の構築をはじめとする四つの成果と今後の二つの課題を示した。

2. 審査経過

本研究は、従前までの意志決定学習のあり方を学習者の視点から批判的に分析し、思考過程の可視化に着目して構築した「基礎的意志決定学習」の有効性について実践をとおして明らかにすることを目的としたものである。

本研究の成果は、次の三点に整理できる。第一に、子どもの学習実態に問題意識をもち、研究のアプローチが図られた点である。実態調査によって、これまで明らかにされなかった子どもの意志決定学習における思考の課題をもとに研究がスタートしている。第二に、認知心理学や行動経済学の研究成果と関連付けて、子どもの意志決定学習における思考の課題が確認バイアスによるものであり、その制御をめざす必要があることを明らかにしたことである。第三に、子どもの思考過程に着目し、直感のバイアスの制御を図った意志決定学習の方法である比較吟味自己内討論法を開発し、実践をとおしてその有効性を検証したことは、従前の授業構成論の課題を克服する新たな提案として評価される。

以上の点から、本研究は、現職の教員としての課題意識に基づく学術的にも意義ある論文であるとともに、社会科学授業実践の改善に貢献するものであるとして高い評価を得た。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 王子明紀 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。